

師弟 命がけの五輪切符



佐々木（現姓永田）七恵さん

女が東京を走った④

ニッポン 人・脈・記
jinmyaku@asahi.com

〈女子マラソン 84年ロサンゼルス五輪の正式種目に〉
そのニュースが、岩手にいた佐々木（現姓永田）七恵（52）に上京を決意させた。

「五輪に出たい。中村先生に教えてもらえたら、どんなにいいだろうと思いました」

中村清は瀬古利彦（52）を男子マラソンのエースに育てあげた名監督だ。

佐々木は岩手の山深い地で、人きょうだいの末っ子に生まれた。幼いころから足が速く、日体大では陸上部。郷里に戻り、高校で体育を教えていた。

81年、つてをたどって東京で中村に会う。思いがけない言葉をかかれた。「マラソンは女性のほうが向いてるんだよ」。佐々木は教師を辞め、中村率いるエスビー食品へ。男子ばかりの陸上部に一人とびこむ。

中村は厳しかった。みんなの前で「マラソンをわかっていない」と怒られる。マラソンとは、走るとは何だ？ 禅問答のような問いもあつた。

ある雨の日。練習の合間、風邪をひくからここで着替えなさいといわれ、佐々木は拒んだ。女の私に外で脱げなんて。中村は顔色を変えて怒った。「おれは70年間生きて学んできたことを全部授けようと思ってるのに、お前はノーと言った。こんなのは本当の師弟ではない」

やがて若いライバルが台頭する。高校生でトラックの日本記録を次々とつくった増田明美（44）だ。「おまえはまた甘い」。佐々木への中村の叱咤は一段ときびしくなった。

むぎ打つような猛練習でひた

すら耐えた。朝20時、昼20時、さらに夕方、男子について20時を走ったことも。瀬古は「七恵ちゃんを見たら、僕らも練習がきついなんていえなかった」。

佐々木は83年、東京国際女子マラソンで初の日本人女王になり、ロス五輪の切符を手に入れた。本番では19位。でも悔いはいなかった。「中村先生のもと、すごい選手たちをベースメーカーに練習できたから女子初の五輪に出られた。私の1の才能が5にも6にもなったんです」

次のソウル五輪に出た宮原美佐子（46）は生まれつき体が弱かった。2歳のとき母におまわられ東京五輪マラソンの沿道へ。「選手のように足が丈夫になっ

てほしい」と両親は願っていた。宮原はマラソン中継があるたびにテレビを見て、瀬古に挑む宗茂（55）、猛（55）双子兄弟のファンになる。若兄弟がいる旭化成に一般社員として入り、社内ジョキング大会で出会った茂らの誘いで陸上部へ。

最初の4年は鳴かず飛ばず。変身するのは宗兄弟が引退し、指導者になってからだ。

「命がけで育てるから、お前も命をかけるべからぬの気持ちでついてきてほしい」といわれて気づいたんです。楽しく走れるだけで満足だったけど、私には結果を出す責任がある」と



宮原美佐子さん

猛が先導し、茂が後ろから「手を下ろせ」「息を吐け」。サンドイッチにされて走りこみ、東京国際女子マラソンで力を試す。88年、大阪のレースで日本女子で初めて2時間30分を切り、五輪代表を射止めた。

茂はいもう。「指導者としてやっていけるか、彼女の成長にかけた。人間の可能性とは本当にすごいと教えられました」

天満屋の監督、武富豊（54）は選手時代、瀬古や宗兄弟らと競った。92年、女子だけの陸上部をたちあげた天満屋のコーチに招かれる。

選手胸のうちを知るために練習後、必ず一人ひとりと向き合って話す。99年、東京国際女子マラソンに挑む山口衛里（35）に「絶対勝てる。五輪に行けるぞ」とくり返した。

不況で実業団の名門チームの廃部や休部が相次いでいた。「山口のあの優勝がなければ、うちのチームもなくなっていたかもしれない」と武富。

その山口はシドニー五輪で7位入賞。アテネに坂本園子（27）、北京に中村友梨香（22）と、3大会連続で五輪「フアン」が天満屋から育っている。（杉山圭子）



武富豊さん